
D-1 グランプリ

MONSU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D - 1 グランプリ

【Nコード】

N0440W

【作者名】

MONSU

【あらすじ】

この世界の名前はマネイチ。どんなことでも、金で解決出来る時代。そんな時、世界の大富豪の アリスト・セフィーロ がD - 1 グランプリ開催の知らせをした・・・

D - 1 グランプリ開催（前書き）

主人公のサレイ・ラオは、筋肉はかなりあるが、頭は学校に行っていないかったために、少しバカである。

D - 1 グランプリ開催

この世界の名前は、マネイチ。

この世界には、二種類の人間しかない。

金持ちか、貧乏人しかない。

そして貧乏人は、毎日金持ちに土下座をやり続け、物を貰わないと生きて行けない状態であつた。

そんな時・・・

世界の大富豪

アリスト・セフィーロ が貧乏人に向けて宣言をした。

「全国民に告げる！今から、土下座ナンバーワングランプリ、略して・・・D - 1 グランプリを開催する！優勝者には賞金を、たんまり出す！」

「なんだそれ？」

「土下座グランプリ？」

「D - 1 グランプリ？」

世界の人達は、口々に言った。
詳しくは、二日後にチラシを配るから、それを見てくれ！だそうです。

さつきから説明してる俺は・・・サレイ・ラオ。

今は27歳、18歳で結婚して、今は、9歳の息子のネスコと6歳の娘のレイヤと27の妻のミネルの四人家族で住んでいる。

だが・・・お金が無さすぎて、子供たちにまで迷惑をかけている。

そんな時に、開かれるD-1グランプリは、俺達家族にとっては、最高の大会であつた・・・

二日がたった。

チラシが全国民に配られた。

【D-1グランプリ開催のお知らせ】

【参加資格：土下座を子供にまでさせないと生きていけない家族の大黒柱が参加可能】

【内容：土下座日本一を決める大会】

【日時：明日の11時】

【場所：そこら辺】

きつとみんなが言っているだろう、
「そこら辺って！どこだよ！」とな！

そうになると、周りの金持ちに土下座する他に参加方が考えられない。

次の日、俺はいつも土下座に行っているバレ・キンの家に行ってみた。

出かける前に家族全員に言われました。

「絶対！絶対に帰って！パパの家は、ここだから！」

その言葉を胸に、今俺は、バレ・キンの前にいる……

「今日は何の様だ？サレイ」

バレは少し笑いながら言った。

俺は、とりあえず、土下座から始めた。

「どうしたんだ？今日は、土下座するのが早いんじゃないか？用件も言わずに……」

「今日は、D-1グランプリについて、詳しく教えて頂きたく、やって来ました。」

「あれか。あれの話は、アリストから聞いている。」

「なら詳しく教えて頂きたいです。」

「参加方だけなら、教えてやろう。」

「ありがとうございます！」

俺は、土下座をしたまま話した。

「参加方は、村の予選に勝ち抜くこと。場所は、村一番の金持ちの家になっている。つまり、ここだ。そして、今ここには、サレイシ
かない。つまり君は、予選突破だ。」

「ホントですか！ありがとうございます！」

この予選突破の後に待つ恐怖をまだ僕たちは知らない・・・

まさかの事態

予選突破したことを、家族に報告するために家へ帰ると、いきなりネスコが抱きついてきた。

俺はその衝撃に耐えられず、こけてしまった。

しかもその時、勢い余ったネスコと頭をぶつけ、二人とも倒れ、意識を失った。

「う．．．うゝん．．．」

俺は目を開けた。

「大丈夫？ネスコ？お父さんとぶつかって頭打ったのよ？覚えてる？」

ミネルが話している．．．誰に？ネスコ？俺はサレイだけど？ネスコは息子の名前だろ？

「大丈夫？お兄ちゃん？お父さんは隣でまだ寝てるよ？」
娘のレイヤが話している．．．

隣を見ると．．．俺がいた．．．俺！？

ということだ！

意味がわからんぞ！

まさかと思い、自分の体を見ると、全体的に小さいし、軽い。
入れ替わった！？

そんな状況の自分を眺めていると、俺の体（ホントの体）が、目をさました。その時とほぼ同時に俺は現状を理解した。

「どこどこ？」って言うおうとしたんだろう・・・目の前に自分がいることにビックリしたのか、話すのをやめた。

「ミネル！俺だよ！俺！サレイだよ！なぜかネスコと入れ替わってんだよ！」

「何をいつてるの？ネスコ？頭打って、おかしくなっちゃった？そんな訳ないわよね」ハハハ

「お母さん・・・ホントだよ・・・」

ちよつと悲しげに、俺の体のネスコが言った。

「ホントなの！二人とも！私は夢を見てるわけでは無さそうね・・・」

「ねえねえ？お母さん？入れ替わったって？何かあったの？何が替わったの？おしえてよ」

「あのな、レイヤ？お父さんとお兄ちゃんの体が入れ替わったんだよ。」

「うーん・・・えー！じゃあじゃあ！お父さんがお兄ちゃんでお兄ちゃんがお父さん！？」

「そうだな・・・」

「そうだよ・・・」

サレイとネスコはお互いを見ながら言った

「そ、そうだわ！目が覚めたんだから、先生を呼ばなくちゃ！・・・

」
ミネルはナースコールを鳴らした。

ぶるぶるぶるぶる・・・

「はい？何かありましたか？」

ナースさんが出た。

「夫と息子が目を覚ましました」

「それでは、先生と一緒に伺いますね」

ブチッ・・・切れた。

一分も経たないのに、医師とナースがやって来た。
えっ？

何でそんなに早いのかって？

そりゃーナースステーションと隣だからだよ・・・

「お体は大丈夫ですか？」

医者と言った。

「体の方は大丈夫なんですが・・・入れ替わってしまったんです・・・」
「」

「何が、替わったのかな？ネスコ君？」

「えっと・・・簡単に言いますと、息子と私の意識が入れ替わったんです・・・」
「」

「そんな、あり得ない話が・・・あるはずが・・・」
「」

「ホントだよ！お医者さん！」ネスコは言った。

息子の発言で遂に、医師は理解した。

その日から、二人は、お互いが戻るまで、今やれるべきことを考え始めた。

決断の朝

俺とネスコは入れ替わってしまった。

俺は、ネスコの代わりを、ネスコは、俺の代わりをしなければいけない……

どうしようか……って思っていたとき、ふとバレ・キインのことを思い出した……

↓回想↑

「悩んだ時は来い！助けてやろう、長い付き合いだ。」

「本当ですか！」

「ただし！条件がある！」

「それは、何ですか？」

「かなり大きな悩みだけだ！食べ物・金は、いつもどおりあげよう。」

「

「わかりました！」

「ただし一度だけだ！」

「はい！」

↓回想終了↑

そうだ！今がその時だ！

→こう思った俺は、ネスコを連れて、バレ・キインのところへ行った。

「今日は珍しいな、親子で来るとは……何があった？」
バレ・キインには、すべてお見通しだった……

「実は私がサレイで、私の体がネスコ何です！」

「どうした？ネスコ、頭がオカシクなったか？どういうことかわからんぞ！」

「バレ・キーンさん！僕が、ネスコなの！」

「どういうことだ！？これは一体！？どうなってる！」

「魂が入れ替わってしまったのです。バレ・キーン、あなたは本当に困ったら相談にのるって言った。なので相談にきました。」

「本当のようだな！ネスコがそんなに、話せる訳がないからな。だが・・・相談にのってもいいが・・・何をすれば良いか・・・」
その時だった・・・

「親方様。アリストのところへ行った忍びからの伝令です。」

「おお！佐助か！久しぶりじゃの。して、伝令とは？」

「辞書でお調べください。」

「意味ではない！内容だ！」

「ですよ〜」

存在を忘れるられてるサレイ親子であつた・・・

「して？内容は！？」

「はい！読み上げます！【元気がバレ・キーン。いきなりだが、前に言うことがある！何か面白いことは無いか？グランプリの決勝戦までの待ち時間、いや・・・数日間、どうせ暇なのだ。何か面白いことでもしたいと思ってな】っとのこと。」

「はっはっはー！あやつらしいワ！」

「あ・・・あの・・・俺達の話しは？」

二人の話しに入って行けず、一瞬の隙で口を挟んだ。

「スマン、スマン。今の話し聞いたる？お前らの入れ替わりは、どうしようも無い！だから、ネスコがグランプリに出るしかあるまい。これでお前達の話しは終わりじゃ。サレイが面白いことしてくれぬか？金は出すから。」

「「えっ！ええっ！」」

二人は驚いて、座っているのにこけてしまった。

「ネスコが出るのは仕方がないことですが、何故に私が面白いことを？子供の体とはいえ、面白く無かったら何されるかわからないです。」

サレイは少し怒った。

「安全は保証する！佐助を護衛に付けるからな！」
自信満々のバレ・キーン

「なぜそこまでするのですか？」

「それは、お前達と俺は、長い付き合いだからだ、それ以外に理由があるのか？」

「「「ありがとっございます！」」」

「ついでに、アリストに聞いておこう。魂の入れ替わりについて。」

そういえば・・・本選の日時を言つて無かつたな！あさつてだ！ここに朝早くに來い！日が昇る前にだそ！」

と言われた、俺達は、一礼してから、歸つた。

次の日俺は、ネスコに土下座の真髓？を教えた。

そして翌朝・・・

キャラ説（前書き）

キャラ説書きました。

どう書いて良いかわからず、自分なりに考えて書きました。

出来れば、何か指摘を下さい。
感想等々待ってまーす！

キャラ説

サレイ・ラオ

27歳 主人公 男

職業 よろず屋

ラオ家の大黒柱であり、村一番の土下座をする。

容姿は、ぼろぼろの着物に、ぼろぼろの麦わら帽子で、普段は護身用に、刃先の悪い刀を持っているが今現在は待っていない。

髪は白く、背は高く、筋肉もある……だが……学力は下の中ぐらいである。

最近、よろず屋の仕事は少ない。

ネスコ

9歳 サレイの息子 男

職業 子供

ラオ家の長男である。

主人公に匹敵する立ち位置である。

ラオ家にはお金がほぼ無いので学校には行っていない。なお、義務教育では無いので、悪しからず。

普通なら、まだ幼い少年なのだが、親が土下座をしに行くのをついていくうちに、大人になっていく。

背は135センチ、力は強い。もちろん学力は下の下。

ミネル

27歳 サレイの妻 女

職業 主婦

この話のヒロインであろう存在だったりする。

実は、バツイチであった。サレイも承知している。
情に弱い。

背は145センチ、力は弱い。
幼い頃、学校に行っていたため、ラオ家の中では、一番頭が良い。
そのため、料理の腕はピカイチ。

レイヤ

6歳 サレイの娘 女
詳しくは説明出来ないが、ツンデレである。

さすが6歳、人見知りが無い。

背は120センチ、力は弱い。
学校には行っていない。

そのほかは不明…

アリスト・セフィーロ

30歳 世界の大富豪 男

25歳で会社を建てる。

28歳の若さで大富豪に。

30歳：ついに世界の大富豪になり、その記念に、D-1グランプリを開催。

力、学力、さらには人望がヤバイ！

バレ・キーン

27歳 サレイの住んでいる村で一番の大富豪。

実は、昔はサレイの家の隣に住んでおり、サレイ家よりも貧乏で、サレイとも仲が良く、風呂まで一緒に入ってしまうぐらいの仲良さだった。

何故かいきなり大富豪になった彼は、サレイのもとから離れ、城に住んでいた。

だが・・・今も二人は仲が良く、バレ・キンはサレイに、他の村人よりも多目に野菜などをあげている。

キャラ説（後書き）

どうでした？

キャラ説のほうは？

分かりにくいでしょ？

もう読まなくてもいいよ！

分かりにくいんだもの！……

でも…次も読んで欲しいな…

（ちよっとツンデレってみた作者であった）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0440w/>

D-1グランプリ

2011年11月11日13時05分発行